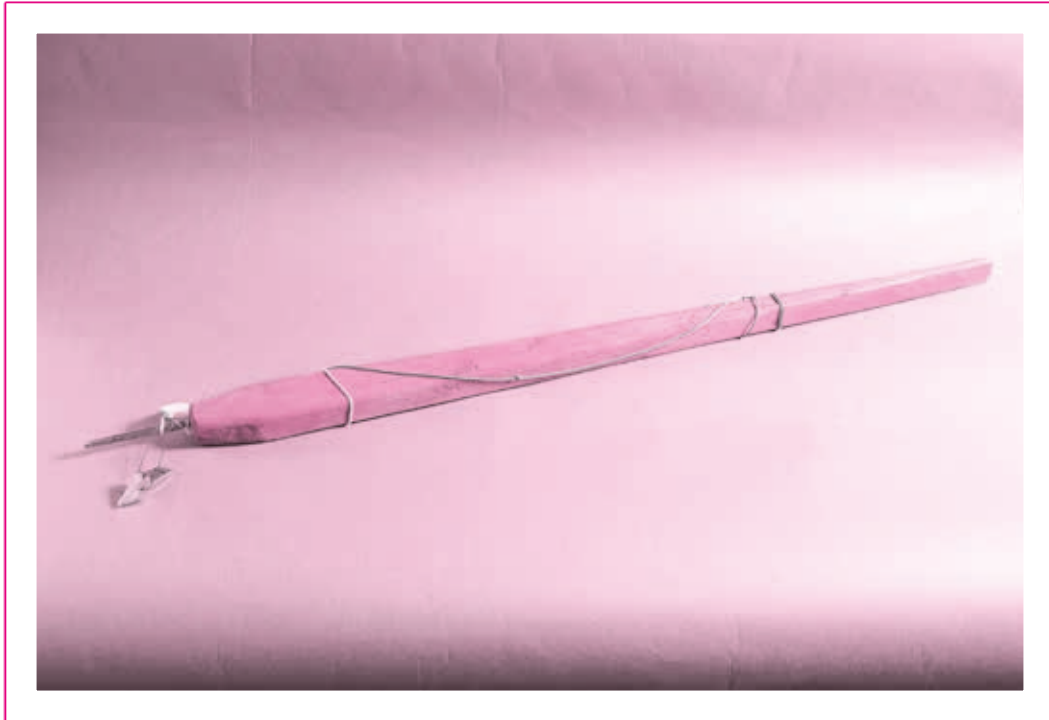




北方民族博物館だより

No.130



HR5.2 アザラシ回収用銚 ユピック・エスキモー 120.0×6.8×3.7cm
 収集地：アラスカ／ベセル 2023年収集 ジョン・ホワイト (John White)作

狩猟したアザラシが沈まないように回収するための銚^{もり}。ネルソン島ナイトミュートのジョン・ホワイト氏が製作した。かつてアザラシは銚で狩猟された。ライフルの普及によって狩猟用の銚は使用されなくなったが、回収用の銚は現在も使用されている。アザラシ肉も食用にされるが、特に油脂は調味料として珍重されている。

目次 Contents

- 1 表紙 アザラシ回収用銚
- 2-3 第38回特別展「北方民族の編むと織る」
 ／講演会「世界のカゴ」
- 4 講座「草木染の世界」
 ／移動展「「暖かい」だけじゃない！毛皮と北方民族の多彩な関係」
- 5 ロビー展「モンゴル・遊牧世界の小道具たち」
 ／ロビー展関連講座「モンゴル民話から見る遊牧世界」
- 6 INFORMATION

第38回特別展

北方民族の編むと織る

2023.7.15(土)～10月21日(日)

本特別展では北方諸民族のさまざまな技術のなかから、編む技術と織る技術に注目し、編み物・織物製品やこれらの製作に用いられる、当館所蔵資料の道具類を紹介しました。

身の回りの自然素材や外からもたらされた素材を用いて、数々の生活用具が、編む技術と織る技術から生み出されてきました。小さなものから大きなもの、単純なものから複雑なものまで、この二つの技術はバラエティに富んだものを創造してきました。

実用品として北方諸民族の生活を支え、地域色を帯び、また精巧な技術に支えられた機能美と呼んでよい美しさを備えている編み物と織物の魅力は尽きません。

編み物や織物は完成に至るまでに、長い時間と幾つもの工程を必要とすることも多く、また技術を身につけたとしても、満足するものが作れるようになるまでには、さらに年月を必要とします。それだけに、編み物と織物からは多くのことが読み取れます。

ところで編み物と織物の区別は時に難しく、どこに着目するかでその境界がかわります。本展では吉本忍氏(国立民族学博物館名誉教授)の定義にもとづき、「張力をかけたタテ糸にヨコ糸を組み合わせたもの」を織物とし、これにあたるものを編み物としています。この定義によるとバスケットの多くは織物に分類されます。ただし、日本語では「バスケットを織る」とは言わず「バスケットを編む」と言うため、このような表現はそのまま用います。

北方では衣類の素材として獣皮がよく使われてきましたが、ユーラシア側でもいくつかの民族で布が織られ、使われてきました。ただし現在はアイヌをのぞくと布を織ることはおこなわれていません。北米では北米北西海岸先住民のトリンギットがチルクットローブを織っていた例がみられます。

北方のバスケットの主な編み方には(1) タテ素材をヨコ素材2本ではさむように編む方法であるもじり編み(織り)、(2) タテ素材とヨコ素材を交差させて編む交差編み、(3) らせん状の主糸を別糸で留めていくコイル編みがみられます。素材の違いや間隔、編みの強弱や装飾により、バスケットには様々なバリエーションがあります。

会場では各民族の特徴ある資料を展示しました。ここでもいくつかを紹介します。

ウリチ

アムール流域の諸民族のなかで、織った帯はウリチに特徴的なものです。ウリチの間に伝わる古い樹皮製の帯を「クイウマリ(アイヌの帯)」とよぶことから、ウリチの帯とアイヌ文化との関連が指摘されています。

サハ

サハはロシア連邦サハ共和国で、ウシとウマの飼育を主な生業として暮らしてきました。サハの編み物にはウマのたてがみと尾の毛が使われます。ウマの毛は漁網用として他の北方諸民族との交易品となっていました。

アイヌ

北海道アイヌはイラクサやオヒョウの繊維を糸にし、腰機に分類される織り機を使って布を織ります。この布から衣類やバッグが作られます。

ござはガマを材料にしています。このとき赤や黒で染めた草や布をもちいて文様を織り込むこともあります。また、ござは、敷物や壁掛けのほか、かつては船の帆としても使われました。

刀掛け帯には植物性繊維のほか獣毛が織り込まれることもありました。

オヒョウやシナノキの樹皮を編んだバッグもつくられています。ハマニンニク(テンキグサ)を使ったバスケットは千島アイヌの間で作られていました。

このほか、靴下や、ブドウ蔓の皮を使ったわらじが編まれていました。

コリヤーク

コリヤークはロシアのカムチャツカ半島からマガダン州に暮らす人々で海岸コリヤークとトナカイ牧畜コリヤークに大別されます。このうち海岸に生える素材を入手しやすい海岸コリヤークが、バスケットづくりをおこなってきました。コリヤークのバスケットは、ベリーや物をいれるだけでなく、子どもをはこぶのにも使われてきました。素材には、日本から流れ着いたとされるナイロン製の漁網もつかわれています。

サミ

サミはノルウェー、フィンランド、スウェーデン、ロシアに暮らしています。トナカイ毛皮製の手袋の他、羊毛糸を材料に編んだ手袋も用いられていました。また小さな織り機をつかって、靴ひもや帯に使われる長いひもを織ってきました。このひもはバッグの取手や、ゆりかごに寝かせた子どもを固定するのに使われます。織りひもには、各地域の特徴ある文様が織り込まれています。

バスケットの材料には、白樺、トウヒ、松等の根が用いられました。

カザフ

カザフは、ロシア、中国、カザフスタン、トルコ、モンゴル国等で暮らす民族です。カザフが飼う主な家畜はヒツジ、ヤギ、ウシ、ウマ、ラクダです。このうち、ヒツジやラクダの毛は紡いで糸にしてひもに織り、住居の装飾等に用いました。現在はアクリルや木綿の糸も使われています。

ヨシ(ハネガヤクサ)を材料にして、移動式住居の砂やネズミ除けの壁も織られています。

アリユート(ウナンガン)

アリユーション列島に暮らしていたアリユートもハマニンニクを材料に、バスケットやカヤックに敷くマット、ミイラの包み布等を織っていました。バスケットは逆さまにして底から編まれました。アリユートのバスケットの精緻さは広く知られており、交易品となっていました。

北方アサバスカン

ヤマアラシの針毛が、衣類や靴、道具類の装飾に使われてきました。ヤマアラシの針は織り機を使って帯にされることもありました。交易でガラス製のビーズがもたらされるようになるとヤマアラシの針はビーズに置き換わってゆきました。

北方アサバスカンは冬の移動手段にかんじきを使いました。かんじきの木枠にはトナカイの生皮のひもが編まれています。

北米北西海岸先住民

北米北西海岸先住民の間では、トウヒの根やシダーとよばれる針葉樹の樹皮がバスケットや帽子の材料に使われていました。

トウヒの根は火であぶって外皮をとりのぞき、さいて糸にしました。染色したり、他の草を巻いたりして文様が施されることもありました。

シダーの樹皮は衣類やマットの材料にも使われています。イラクサの繊維からは漁網が編まれました。

エスキモー/イヌイト

他の地域と同じようにハマニンニクを材料にバスケットがつくられてきました。エスキモーの古いタイプのバスケットはもじり編み技法でつくられてきましたが、現在、コイル編みのバスケットが主流となり、これがエスキモー文化の象徴ともなっています。コイル編みは新しい技法にも関わらず、エスキモーの女性たちにかつての民族文化を想起させ、バスケットをつくるのが癒しにつながっていることが指摘されています。

新しい動きとして、ヌニバク島では、1960年代末にジャコウウシの毛を利用した編み物組合が結成され、現在約250名の会員が地域ごとに決められた文様の編み物を製作しています。

この特別展を開催するにあたり、ご協力、ご助言をくださった関係各位に心から感謝申し上げます。特に次の方々に特段の協力をいただきました：久郷洋子氏、城野誠治氏、廣田千恵子氏。

(学芸グループ 笹倉いる美)

主な参考文献

大塚和義 2003「ウリチの帯・クイウマリ：存在の確認とその意味」

『北太平洋の先住民交易と工芸』 思文閣出版

キュー、D.、P.E.ゴッダード 1990『北西海岸インディアンの美術と文化』 六興出版

佐々木史郎 2020「北方寒冷地域における織布技術と布の機能」

『アイヌ・北方諸民族の衣文化と織布文化』 東京国立博物館

バーチ、A.S. 1991『図説 エスキモーの民族誌』 原書房

吉本忍 2013『世界の織り機と織物』 国立民族学博物館

Damas, David ed. 1984 *Handbook of North American Indians*. Smithsonian Institution

Lee, Molly 2005 "More Than Just a Tourist Art: The Communicative Dimension of the Yupik Eskimo Mingqaaq (Grass Basket)."

『北太平洋沿岸の文化：政治経済と先住民社会』（第19回北方民族文化シンポジウム網走報告書）財団法人北方文化振興協会



会場の様子

講演会

世界のカゴ

2023.7.16(日) 10:00-11:30

講師：伊藤朝子（カゴアミドリ店主）

特別展『北方民族の編むと織る』の関連事業として講演会を開催しました。



伊藤朝子氏

講師は世界中のカゴを扱っているバスケット専門店・カゴアミドリの店主のおひとり伊藤朝子さんです。伊藤さんは、手仕事・フェアトレードをキーワードに、世界各地で作られているカゴにつ

て現地で取材しています。

講演会では1.「カゴのはじまり」、2.「世界のカゴを分解する」、3.「北方民族の編むと織る」、4.「世界のカゴを訪ねて」、の順でお話されました。

まず1.「カゴのはじまり」では、イスラエルで1万5千年前のカゴが出土していることを例に、人類が古くからカゴを作ってきたことや、そのカゴの作り方が現在とさほど変わっていないことが紹介されました。

2.「世界のカゴを分解する」では、カゴの素材に着目されました。その場所で身近に手に入る植物、水に強く、腐りにくいもの、しなやかで、曲げたりねじったりできるもの、強い繊維を含むもの（切れにくく、折れにくいもの）が選択されていることが紹介されました。また、細くやわらかい素材である草はコイリングの技法が用いられるなど、素材が技法を決める面があることもお話いただきました。

3.「北方民族の編むと織る」では特別展にあわせて、北方地域のカゴの特徴として植物性の素材に加え、動物性の素材（皮、毛、クジラヒゲ等）が使われることがあげられました。

4.「世界のカゴを訪ねて」では伊藤さんが取材されたポーランド、フランス、ケニアのカゴ事情が紹介されました。ケニアでは女性たちが歩きながらでもカゴを編んでいるのが印象的だったそうです。カゴによる収入は彼女たちの暮らしを支えているそうです。またフランス、ポーランドではカゴ編みの継承者問題があるということで、日本と事情はかわらないことがわかりました。

たくさんのカゴもご持参くださったので、参加者は土地土地の暮らしに合わせて用いられてきた各地のカゴにふれながら講演の内容を確認していました。

(学芸グループ 笹倉いる美)

講座

草木染の世界

2023.6.30(金) 10:00-11:30

講師：山崎和樹氏（草木工房主宰・染色工芸家）

北方諸民族の間にも植物を使った染色技術があることから、草木染の第一人者である山崎和樹氏を講師とした講座を開催しました。



講座のなかでは講話と並行して、ハンノキとイチイを使った染色実演も行いました。北海道アイヌの間ではイチイが、

山崎和樹氏 また北海道アイヌのほかコリヤーク等でもハンノキが染料に使われていることからこの二つを選択しました。今回使ったハンノキはミヤマハンノキです。

現在一般的に使われている草木染という言葉は、山崎氏の祖父である染色家で作家の山崎 斌^{あきら}氏が命名したものです。二代目の青樹氏、四代目の広樹氏と、山崎家では四代にわたり、染色に携わっておられます。

講座のはじめには、「日本の色：草木染の色と技法」のタイトルで、古代からの染色の技法や、色彩名称について紹介されました。例えば平安時代は奈良時代と比べると、染料はほぼ同じ種類でも、重ね染め等で微妙に異なる色を出し、江戸時代には木綿の栽培が盛んになったこととともない、木綿が藍によく染まることから庶民にも藍染の衣服が普及したことが述べられました。

山崎氏は草木による染色を科学的に研究されていることで広く知られています。本講座でも世界で使われている天然染料の色素を化学式のレベルで分析したうえで、それぞれの染料が媒染剤の違いでどのように発色されるのかを解説されました。

山崎氏は普段は絹を中心に染めておられますが、今回特にお願いで絹のほかに、鹿革、魚皮、ヘラジカ皮も染めていただきました。ハンノキとイチイの樹皮を煮出して染料を作りました。なお北方では煮出す以外に、直接素材になすりつけて染めることもあります。染料、媒染剤、染めるもの前処理によって、染まり具合が異なることが確認できました。

カラフルに染めた絹布を30本以上ご持参くださり、参加者の方々は自然界にある染料からこのように深く染まることに関心をもたれ、質疑応答も活発におこなわれました。

(学芸グループ 笹倉いる美)

移動展

「「暖かい」だけじゃない！
毛皮と北方民族の多彩な関係」

共催：斜里町立知床博物館・国立アイヌ民族博物館・ArCS II（北極域研究加速プロジェクト）沿岸環境課題
2023.4.19-5.21

会場：斜里町立知床博物館・交流記念館ホール

北方地域の諸民族は、衣類を始めとするさまざまな生活用品の素材として動物の毛皮を活用してきました。また、美しい毛皮は、他地域との交易品としても重要でした。この移動展では、北方地域の代表的な動物とその毛皮を取り上げ、それらがどのように活用されてきたのか、実物資料とともに紹介しました。なお、この展示は、2022年4月に当館で開催したロビー展を基に、移動展として再構成したものです。

会場では、トナカイ、ヘラジカ、オオカミ、ホッキョクギツネ、ワモンアザラシ、クロテンなどの毛皮と、その毛皮を素材とした民族資料を展示しました。

このうちワモンアザラシのコーナーでは、丸ごと一頭の毛皮や毛皮製の衣服とともに、知床博物館所蔵のワモンアザラシの剥製を展示しました。また、「アザラシの毛皮とスキー」と題した解説パネルでは、山スキーで使用されるすべり止め「シール」の役割や、アザラシ皮製とナイロンやモヘア（アンゴラヤギの毛）製のシールの違いについて説明しました。併せてアザラシ毛皮製シールや、裏にアザラシの毛皮を貼りつけたスキー（知床博物館蔵）の実物も展示しました。

会場の制約もあり、当館ロビー展よりもコンパクトな移動展とはなりましたが、知床博物館所蔵の毛皮や剥製と組み合わせることによって、当館ロビー展とは一味違った視点を加えることができました。

会期中の5月6日には共催のArCS IIより日下稜氏（北海道大学低温科学研究所）、国立アイヌ民族博物館より是澤櫻子氏にご来場いただき、私を加えた3名でギャラリートークを実施しました。

(学芸グループ 中田篤)



アザラシの毛皮とスキーのコーナー

ロビー展

「モンゴル・遊牧世界の小道具たち」

2023.5.20-6.18

モンゴルでは、ヒツジ、ヤギ、ウマ、ウシ、ラクダなどの家畜を飼い、その乳や肉を利用しながら季節ごとに住みや放牧地を移動させる遊牧生活が営まれてきました。当館では、これまでさまざまな視点からモンゴルの文化を紹介してきましたが、このロビー展では、モンゴルの遊牧生活を彩るとっておきの「小道具」を取り上げ、それぞれについて少し詳しく紹介しました。

展示では、ケース別に「ウマを大切に」、「遊牧民の装い」、「骨で遊ぶ」、「お茶でひと休み」、「乳と酒」というテーマを設定し、それぞれに関係する資料を配置しました。

例えば「ウマを大切に」というテーマでは、^{あぶみ} 鍔付きの鞍や汗取り用ヘラを展示しました。モンゴルの遊牧民にとって、ウマは今も大切な移動手段です。鞍と鍔を使うことによって、ウマの背に安定して乗ることができます。また、ウマは生き物なので、動けば汗もかきます。汗取りヘラ（現地呼称：ホソール）は、ウマの汗をぬぐう道具で、ウマの体に押し当て、汗をこそげるようにして取るのに使います。

「遊牧民の装い」のケースでは、長衣（モンゴル語で「デール」）を着て帯を締め、ブーツを履いて帽子を被るというモンゴル遊牧民の正装を紹介しました。デールはモンゴルの伝統的な民族衣装で、横で合わせてボタンで留め、帯を締めて着用します。ブーツは二重になっていて、外側は一般に牛革製、内側はフェルト製です。帽子は、特に男性にとって大切な身だしなみの一部で、家の中でも帽子を脱がないのが礼儀とされます。併せて展示した火打ち金付きナイフは「蒙古刀」とも呼ばれ、ナイフと、箸、火打ち金がセットになったものです。このセットは男性の日常的な携帯品、装身具として使われていたと考えられます。

本展示では、仕切りの数を減らし、空間を広く使ってケースを配置しました。ややまとまりに欠ける感もありましたが、開放的で観覧しやすい展示になったのではないかと思います。

（学芸グループ 中田篤）



ロビー展の展示風景

ロビー展関連講座

モンゴル民話から見る遊牧世界

2023.6.17(日) 10:00-11:30

講師 西村幹也氏

(NPO法人北方アジア文化交流センターしゃがぁ・理事長)

モンゴルに古くから伝わる民話を材料に、そこに登場する野生動物や家畜、風景などを表す言葉について、その意味はもちろん、背景に広がる伝統的な遊牧文化、世界観についてお話しいただきました。講師は、モンゴルに関わり始めて30年以上、3度の留学とほぼ毎年のフィールドワークを重ねてきた西村さんです。

まず最初に紹介されたのは、「ヤマネコとアナグマ」という民話です。人里離れた場所に、互いに仲の悪いヤマネコとアナグマが住んでいました。あるときヤマネコは孤独な生活に寂しさを感じ、アナグマに友達になろうと呼びかけますが断られてしまいます。一方、アナグマも同じように孤独を感じていて、ヤマネコの申し出を断ったことを後悔し、改めてヤマネコに友達になろうと呼びかけますが断られてしまいます。すると今度はヤマネコの方から友達になろうと呼びかけるものの断られ…、ということを繰り返す、結局いつまでたっても友達になれませんでした。

また、「ジョノン・ハル」は、日本でよく知られる『スーホの白い馬』とは違った馬頭琴誕生の物語です。この話には、やせてみすぼらしい姿をしていますが、四本の足首のあたりに羽が生えていて、ものすごいスピードで空を飛ぶ黒いウマ「ジョノン・ハル」が登場します。

他にもモンゴルの家畜や自然、宗教、食文化を題材にしたものなどさまざまな内容の民話、そしてそのなかに見え隠れするモンゴル文化の特徴に関する西村さん独自の見方をお話しいただきました。

本講座は、西村さんがトプショールという弦楽器をつまびきながら、落語のような語り口でお話するという形式で実施しました。当館では初めての試みでしたが、多くの参加者の方には、好意的に受け止めていただけたようです。

（学芸グループ 中田篤）



西村幹也氏

ロビー展 写真で振り返る日本のアラスカ調査3

日本におけるアラスカ研究のパイオニアである岡田宏明・岡田淳子夫妻が撮影したアラスカ州ネルソン島の写真から日本のアラスカ調査を振り返ります。

会期：令和5年(2023年)11月3日(土)～12月10日(日)

会期中の休館日：11月13日、20日、27日、12月4～6日

会場：北海道立北方民族博物館ロビー

観覧料：無料

ロビー展 東京文化財研究所・北海道立北方民族博物館共同研究展 文化財写真－北方民族の文化多様性を伝える

東京文化財研究所と北方民族博物館は令和4年度から文化財の記録作成手法等についての共同研究で、文化財写真のあるべき姿をさぐってきました。その成果を北方民族博物館の所蔵資料写真展の形式で紹介いたします。

会期：令和5年(2023年)11月3日(土)～12月10日(日)

会期中の休館日：11月3日、20日、27日、12月4～6日

会場：北海道立北方民族博物館ロビー

観覧料：無料

主催：独立行政法人国立文化財機構東京文化財研究所・北海道立北方民族博物館

第37回北方民族文化シンポジウム 網走 「北方民族とジェンダー2」

北方諸民族の伝統文化における男女の役割分担と、欧米発祥のフェミニズムやジェンダー平等の価値観との間には大きな違いがみられます。本シンポジウムでは、昨年に引き続き、北方諸民族文化における伝統的なジェンダーの在り方やその歴史の変遷、現状と課題を検討します。

■日程 令和5年(2023年)10月21日(土)、22日(日)

各日9:00-16:00

■会場 オホーツク・文化交流センター(エコーセンター2000)大会議室(北海道網走市北2条西3丁目/Tel.0152-43-3704)

■内容 国内外の専門家・研究者による研究発表(同時通訳付き)

■発表者 大野あずさ氏(大阪経済大学)、地村みゆき氏(愛知大学)、廣田千恵子氏(北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター)、阿比留美帆氏(東京外国語大学)、林妹彩氏(北海道大学大学院生)、佐々木千夏氏(旭川市立大学短期大学部)、V. ウラジミロワ氏(スウェーデン・ウプサラ大学ロシア・ユーラシア研究所) G. ペロリュブスカヤ氏(カナダ・カルガリー大学大学院生)、コメンテーター:北原モコトウナシ氏(北海道大学アイヌ・先住民研究センター)

■座長 佐藤円氏(大妻女子大学)、甲地利恵氏(北海道博物館)、岸上伸啓氏(国立民族学博物館)、呉人恵(北海道立北方民族博物館)

■主催 一般財団法人北方文化振興協会・北海道立北方民族博物館

◇関連事業 野花南(のかなん)コンサート

「風紋の調べ～馬頭琴とサンドアート～」

◇出演 野花南(嵯峨治彦:馬頭琴、喉歌・嵯峨孝子:サンドアート、朗読)

◇日時 令和5年(2023年)10月4日(水)18:00開場、18:30開演

◇会場 オホーツク・文化交流センター(エコーセンター2000)エコーホール 入場無料(整理券が必要です)

※整理券はオホーツク・文化交流センター、網走市役所、北方民族博物館で配布しています。

INFORMATION

行事報告

◆6月18日(日)、第9回ユハンヌス夏至まつりを開催し、第15回モルック大会、フラダンス(レイアロハフラ網走)、フィンランド風スープと白樺樹液の無料配布を実施しました。



レイアロハフラ網走の皆さん

◆7月22日(土)講習会「リストウォーマー編み」(講師:結城伸子氏:造形作家)を開催しました。

◆7月23日(日)講習会「すず糸のプレスレット」(講師:結城伸子氏:造形作家)を開催しました。



結城伸子氏

◆7月29日(土)はくぶつかんクラブ「ビーズ織りで作るミラーキーホルダー」(担当:平栗美紅解説員)を開催しました。

◆8月4日(金)「道立北方民族博物館活用学習のための指導者研修」として教職員を対象にアイヌ文化の研修会(講師:森岡健治氏:国立アイヌ民族博物館、岡田恵介氏:公益財団法人アイヌ民族文化財団、野口泰弥:当館)を実施しました。



森岡健治氏



岡田恵介氏

◆8月5日(日)はくぶつかんクラブ「サミのひもで作る腕時計」(講師:菅原章子解説員)を実施しました。



上手に作れたかな?

◆8月20日(日)上映会「北方民族博物館シアター夏」(講師:野口泰弥学芸員)として「サーミ人の錘り機」他2本を上映しました。

北方民族博物館だより

No.130

令和5年(2023年)9月22日発行

編集・発行 北海道立北方民族博物館

〒093-0042 北海道網走市字潮見309-1

Tel 0152-45-3888 Fax 0152-45-3889

e-mail: tonakai@hoppohm.org

http://hoppohm.org

指定管理者

一般財団法人北方文化振興協会